

特 54

21

# 中嶋瘰癧

明治十七年八月廿日

楊河周延

侯松助

壬里

早川

田代



# 足利義満の御成敗



## 國勳懲洛陽譚

## 淨瑠璃 上の巻 富貴寄盃 下の巻 初卯詣鷹會

幕目  
京都室町御所の場

網船の場

早川清三  
船大工卯之助  
非人卯之助

我當

船大工丑松  
扇屋三郎兵衛  
布袋  
野良市  
市藏

貳幕目

北野天満宮社内の場  
寺之内吉久館の場  
加茂堤の場

六幕目  
丑松卯之助隣住居の場

七幕目  
新町九軒夜櫻の場  
同扇屋貳階の場

吉久の奥方江川  
松助女房お梅  
扇屋若菜七助  
實の小西七之助  
吉久の僕勝助  
料理人喜助  
壽老神  
鹿呂松  
松助むすめお松  
旅籠屋大坂屋伊兵衛

植木屋繁藏  
佐渡の島人三吉  
根羽吉  
杉本長治  
原田屋手代清助  
高家吉久  
原田屋手代清助  
扇屋三郎兵衛  
市藏

三幕目

粟津の里玉里身賣の場

八幕目

佐渡の國吉久配所の場  
扇屋玉菊部屋の場  
今宮村消三隠家の場  
大詰

丑松女房おなつ  
引船新造舎り木  
茶屋女  
仲間源八  
扇屋の若菜七助  
實の小西七之助  
吉久の僕勝助  
料理人喜助  
壽老神  
鹿呂松  
松助むすめお松  
旅籠屋大坂屋伊兵衛

高家吉久  
原田屋手代清助  
扇屋三郎兵衛  
市藏

四幕目

伏見原田屋店先の場  
松原河原勝助殺の場

扇屋玉菊部屋の場  
今宮村消三隠家の場  
大詰

吉久の僕勝助  
料理人喜助  
壽老神  
鹿呂松  
松助むすめお松  
旅籠屋大坂屋伊兵衛

吉久の僕松助  
島人幸藏實の松助  
喜次郎

五幕目

松助身賣の場

宇治の里智妙庵室の場  
同扇の芝敷討の場

吉久の僕勝助  
料理人喜助  
壽老神  
鹿呂松  
松助むすめお松  
旅籠屋大坂屋伊兵衛

吉久の僕松助  
島人幸藏實の松助  
喜次郎

○序まゝ本舞臺都而京都室町御所の体時の鐘鳥笛よて幕  
明く爰は高瀬華の足輕四人居る(足)火附の盜賊を詮義な  
さんト四人橋掛りへ這入る上手より源八忍びの拵らへよ  
て出て來り呼び子を吹く塀の内より繁藏同じ拵らへよて  
半身出て(繁)源八か(源)繁藏かそよして首尾の(繁)首尾  
よくやつた彼の品又外に百兩盗んだ(源)スリヤ大手柄だ  
(繁)然し吉久さへ罪に落せば長治さまの無念の晴れると  
いふものだ此一品を吉久の屋敷へかつぎ込(源)主人の恨  
をはらすこんたんと爰へ足輕出て(足)怪しひ曲者ト打て  
掛る(繁)エ、何を任やアぐるトはやい合方よて道具廻る  
○本舞臺都而足利家館の体時太鼓よて道具廻る爰は俵人  
長治外は敵役諸士三人立役諸士三人住ひ長治手紙を見て  
居て(俵)將軍家御秘藏の白銀の御釜ふんじつひ心得難く  
(長)御寶藏の内は怪しひ番狀(俵)それゆへ吉久公の仕業  
と仰せ成るが(長)いかよもト此時揚幕よて呼吉久公の  
入りト是にて向ふより吉久冠り束帯の拵らへ出て來りみ

きく見て(俵)吉久公よのイヤまづ是へト吉久舞臺へ來  
り(吉)承給れば當御館内は火災ありしよし驚き入つてム  
るシテ傍尋とい何事候や(長)外でもムらぬ出火の義よ  
付貴公に詮義のそぢある也へ(吉)何手に詮義の筋とい  
(長)是なる手跡覺へがムるの(吉)手が手跡は寸分違ぬ大  
師流(長)昨夜の盜賊火附の貴殿でムらふ(吉)手のつ  
て覺へムらぬト此時侍いせん箱を抱へ出て(侍)ハアヤ  
ト升吉久公御出門の跡へ這入る吟味いたせし未廣庭の角  
は箱ありしゆへ持參仕つてムり升るト貳重へ箱を置下手  
へ這入る長治箱の蓋を明見て恠りし(長)吉久公の館の  
内に此盜益が(吉)どふしてそれがヤ、ヤ、(長)コリヤ  
いよく火附盜賊と極つたり身共と一所よお越し被成れ  
(俵)アイヤ長治とのお待被成れ未だ主人細川の掛りされ  
を何れ此方より傍引渡やと(長)然らば拙者の主人へ此段  
申上るでムるト長治始めみきく橋掛りへ這入る跡よ吉  
久俵人のこりこさし(俵)貴公の心中滲さつしやと然し

何か意恨を受べき爰へムらぬか(吉)意恨受べきい見れ  
ハムらぬと長治が子が娘玉里を妻よくれとせしゆへは  
づかしめ遣せしが若やそれらの意恨よてト此時足輕出て  
山名公より吉久公をお渡し被成れとの上意でムる吉久公  
お立被成れ(吉)淺間敷身の成行じやあアト此仕組時の太  
鼓よて道具廻る  
○本舞臺都而元の道具よ成る爰は長治繁藏植木屋の拵ら  
へよ成り源八仲間の形り立掛り居る(長)首尾よく吉久を  
罪よ落せしからのモウこつちの物だ(源)是とやもアノ玉  
里めをお旦那へ差上げばみぢ目見さいもの(繁)御旦那  
まだ外は傍手段ト此仕組はやき合方にて幕  
○貳幕日本舞臺都而北野天満宮社内の体時拍子よて幕明  
くお梅茶屋娘の拵へ參詣の仕出四人居てせりふあつて  
社内へ這入る此時向ふよて(源八)うしやうくと臺拍子  
よて長治羽織大小源八仲間の拵(伊)兵衛島の着附是を引  
立出で來りお梅伊兵衛を見て(梅)おなたの大坂屋の旦那

さまどう被成ました(伊)アア開て下され旦那様の足跡を  
踏だゆへでムるわいのよ(源)屋敷へうしやアがれト引立  
る此時彦九郎浪人の拵らへよて出て來り(彦)源八待ちや  
れ(長)坂上彦九郎(彦)身共に願だ一條忘れの被成まひお  
忘れあら此町人前でやそふか(長)それとやされて(彦)  
然らば邪な是成る町人身共がゆるす早く參れ(伊)れゆ  
るし成れて下さり升る(梅)アア旦那さまこちらへお出被  
成ませト兩人茶店の内へ這入る(彦)戀の叶わぬ腹いせよ  
吉久を罪に落と爲大師流の手紙を書てくれやうびの望み  
次第とい、おそつたがその禮いどふて下さるのよ(長)  
成程其腹立の尤其方の僞筆よて吉久めを首尾よく罪よ落  
せしゆへ當座のはらびト懐より百兩包ミを出し床木の上  
よ置彦九郎見て(彦)杉本様是の百兩包でムるの(長)いか  
よも(彦)此禮金のお歸しや升ふ(長)此禮金の不足でムる  
か(彦)いかよも(長)シテその金高の(彦)金千兩でムるそ  
れがいやなら自願し升ふ(長)千兩遣とよが爰に往來何所

を境内でこつそりと(彦)成程をれも三人門の内へ這入る伊兵衛出て(伊)今の漸しの様子でい吉久さまを罪おとせしアノ彦九郎は偽筆をか、せ長治の仕業であつたか此事吉久さまのお屋敷へおしらせやとふかイヤ、まだ外は相談があるおぬかしたは是もつさり悪事の談合でレ今の跡を聞いて遣らふかト門の内へ這入る向ふより玉里振り袖娘の拵らへ跡より花野腰元の拵らへよ出て来り(玉)父上吉久さまの難のはれるよと願せし今もか利益のさいといふ(花)追つけ利益がふり升ふ(玉)花野をなたのし祈禱を願ふて来てたのいふ(花)畏り升たト門の内へ這入る愛へ長治出て(長)コレ玉里どの身共の戀をお叶ひ下さ(玉)さふぞればつかりのおゆるし成れて下さり升せト愛へ源八出て(源)彦且玉里が得心せねばさアそれ役所へお連れ被成を吉久諸共せめてねやり被成れト吞込せる(長)成程そちが通る玉里を引立る(源)心得升たト引立よ掛る此時清三町人の拵らへよ出て

て源八をなげる(源)何んでおれを投たのだ(清)何んであなたを私が投てよろしうり升ふ(長)詮議のゆる女おせ留たのだ(清)それいゝあなたのお爲を存て(長)何と(清)さればでふり升する此詮議の上からの下知でふり升るか(長)夫の(清)此女中をおゆるし被成升るか(長)よい中途の事ゆへ今日の許をト兩人門の内へ這入る愛へ花野出て(花)これいゝ姫君の修難義修救ひ下され有難ふり升る(玉)花野今の様子(花)門の内から見て居り升た(清)まかし又も障りのさい内よお歸り被成れ升せ(玉)さやう致升ふ(清)私が御宅まで送つてあげ升ふト三人向ふへ這入る愛へ長治源八彦九郎出て(彦)此上の白州院より使と偽り(長)かならせ首尾よく玉里をこつちへト此仕組ま拍子よて道具廻る

○本舞臺都而吉久玄關先の体愛に玉里花野清三居て(花)姫君さまの修難館でふり升るト是にておさ出て来る(彦)お歸で(花)姫君さまの御難義を御救ひ下されたか

方もへ御禮をいふて下され(彦)それいゝ有難ふり升る(清)それで、私の是でお別れ申升ふト清三向ふへ這入る愛へ江川褌衣裳腰元付出て(江)玉里今戻りやつたか(玉)ハイ只今歸り升てふり升る(江)勝助よ逢なんだか(玉)イエ、逢ひ升せぬ(江)そち逢ひ奥へ行きやア(腰)畏り升たトおさ始めまなく、奥へ這入る(玉)父上流罪と定まる上り館を立退升ふト愛へ勝助出て(勝)姫君お歸りでふり升るか問注所の俄に姫君御召われ、向ふへト源八袴羽織にて出て来り(源)白洲いんより使者玉里姫をのり物よても苦しからせ早ふ、御同道(玉)乗物よて苦からせり自が出頭仕升ふ(江)奥へいて支度しやと玉里奥へ這入る愛へ直陸尺縹をかつき出て来り(源)それ乗物をト縹をかつき源八先縹をかき這入る(勝)何か様子がふり升ふ跡より様子をト勝助這入る愛へ玉里出て(玉)母さま(江)こあたをどよして愛よ(玉)乗物を幸ひ松助自らに替り(江)チ、でかいた(玉)少もはやく館をばト此時足音

そる兩人小隠れをる愛へ伊兵衛出て来り(伊)お願ひ申す、ト腰元をさく、出て来り(腰)大坂屋どの何の御用か(伊)姫君さまは(腰)奥さま姫君さまどこへやら(伊)何奥さまがコリヤかふして居られぬ、ト此道具廻る

○本舞臺都而加茂堤の体愛へ丑松おあつ、出て来り(丑)コリヤおあつとよ、それれが妹の亭主の松助よ逢度か松助と斗りじや、おあつとよ、それれが妹の亭主の松助よ逢度か松助とウ夜も更たから今夜は此辻堂で、ト休み仕升ふト辻堂の内へ這入る愛へ以前の縹ト彦九郎源八出て来る縹をかき置て這入る(彦)サア玉里愛へ出なせ、ト戸を明る松助姫の形りよて出る(源)姫と思ひの外コリヤ何者だ(松)松助といふ下郎だ、いらが巧みの底をぬくのだと愛へ丑松おなつ、出て(丑)松助どのか(松)おぬしの梅の兄かト愛へ勝助出て(勝)松助ぬかるな(松)勝助か合点だト是より唱物合方に成りだんまり充分あつて見得よて幕

○三幕日本舞臺都而粟津驛の体馬士頃よて幕明ト愛よ獲

伯忍かき二人お虎居て(虎)養伯さんよふお見舞下され升  
た(養)病人を大切に被成れト養伯向ふへ這入る爰へ勝助  
出て来り(勝)チト物がお尋ね申度うムリ升る(虎)とまた  
でムリ升る(勝)廣瀬どのの内でもムリ升か(虎)甚兵衛の  
死なれ升たが(勝)何甚兵衛どのの死れ升たのト爰へ奥よ  
り世話娘よて玉里出て来り(玉)お虎どのの先生の歸り升た  
か(勝)そふいふおきたり玉里さまでムリ升るか(玉)そあ  
たの勝助(虎)此方方をえさる人か(玉)勝助といふらら  
が家来じやわいぢア(勝)あなたさまのお行衛を尋ねて居  
り升た(虎)ドレ私ハ奥へト這入る(勝)姫君様敵がわかり  
升たといふわけハモシ集人でムリ升るそこに一ツの難と  
いふハ賄賂金で吉久公の命が助り升か(玉)合点行ぬとち  
が詞日頃不和成り山名細川其臣集人が一決なし交を罪よ  
落せしよ(勝)とつくりと御思案を被成させ(玉)奥で思  
案を仕升ふいなアト玉里奥へ這入る橋掛りより繁藏出  
て来り(勝)手ゆへハ繁藏何に仕來た(繁)手ゆへハ長治さ

はよかたんなし玉里を身賣の助鉄砲も來たのだト兩人見  
得にて此道具廻る  
○本舞臺都而お虎内奥座敷の体合方よて道具納る爰は松  
助居て爰へ奥より玉里出て来り松助見て(松)玉里さまで  
ハムリ升せぬか(玉)松助でハないか(松)モシ姫君さま  
よハ明日は吉久さまハ佐渡へ御流罪でムリ升るト爰  
へ勝助出て(勝)アノ爰な偽者め(松)わりや勝助何んでお  
れが偽(勝)チ、其偽といふのハ姫君を集人は取持心だ  
らふ(松)何でおれがそんな事をト兩人争ふ玉里留て(玉)  
松助ハハムリより眼を還る出てうせうト玉里勝助奥へ這  
入る(松)アノ勝助のそふりとハ、コリヤ一ト詮義ト立を  
爰へ玉里出て(玉)詮義に及ぶこれ見てたモト手紙を渡  
そ松助見て悔りおし(松)松助へ玉里よりト手紙をよんで  
(松)あなたのお心もわかり升たト三郎兵衛遊女屋の亭主  
の形よてお虎出て来り(三郎)さつと證文をさめたお子を  
連れて行ふ思ふが松助さんが歸るまでいふから待升たがは

おしが渡たら連行升せト金を渡す(松)委細ハ手紙でわか  
り升て姫君此お金を持升て跡より佐渡へ参り吉久さまよ  
右のお断ト此時江川病ひハ巻よて出て(江)様子ハのこら  
を聞升た孝心な娘もム行さるの(玉)母さらばト駕に乗  
りみさく(愁)の思入にて向ふへ這入る跡ハお虎江川をさ  
そりながら手拭よて江川の咽をみて殺し金をとる爰へ繁  
藏出て(繁)婆アさん其金をこつちへよこせト是より立廻  
りに成りトハお虎を殺て金をとるト爰へ松助出て(松)奥  
さま只今歸り升た(繁)ヤアそいつハ大變だト松助内へ這  
入る繁藏外へ出る松助繁藏のどがたを見て(松)扱こそ人  
殺しト幕

が栗津小居る玉里といふ女をおぬしの世話でとつかいは  
めこんで來れ(五郎)其玉里ハおれの世話で証文を卷た(  
勝)そいつハ何んとよの事か(五郎)それに付て大とよと  
ふが出來た(勝)そふとよとよとよとよとよとよとよと  
おれハ迎ひよいつて見ると玉里ハ扇屋の主じが連れてハ  
つたが其跡のお袋やお虎といふ婆アまで切殺されたト勝  
助是を聞悔りして氣をかへ(勝)そふかそれぢやア繁藏が  
ト爰へ繁藏出て來り勝助見て(勝)チ、繁藏かチ、い、所  
であつたおれといつ所よ來ハト無理ハ引立這入るト爰へ  
松助出て來り(松)アノ奥さまの成行斯ふモ難義が重なる  
ものかト此時清助出て來り(清)おきたり船よ乗のでムリ  
升るか(松)ハハ船に乗る者だか吉久といふ人が佐渡への  
出船ハあり升たの(清)今朝出船よ成り升た(松)たばこそ  
切らしたか此荷物を買つて來るまで預つて下されト荷物  
を置て這入る爰へお梅お松よ手を引かれ出て來り(梅)コ  
レお松とこらで支度を仕て行升ふ(清)サアこちらへお出

被成ませト清助お梅お松這入る爰へ繁藏勝助出て来り(勝)コレ繁藏斯ふ断もわかり手めへ江川とお虎を殺しとわらば金を割てくれ(繁)金を割つて遣るから松原川原まで来てくれト兩人下手へ這入る爰へ(松助)出て来り(松)今の勝助主をさびむら姫君を賣ふと斗りしきやつるれを引とらへて一ト詮義ト清助出て(清)お歸りでムリ升るか(松)急よ京へ引返さねばならぬ荷物を持って行升ふトお梅の荷物を持って這入る爰へ梅伊兵衛出て(伊)こなたは目が悪ひのよどこへ行被成る(梅)ハイ吉久どのいふ高家の家來で松助といふ者を尋ねよ参り升た(伊)そんならこなた松助さんのトお梅は風呂敷包みを見て(梅)どふやら違ふそ様子ト風呂敷包を振る中より手紙出る伊兵衛見て(伊)コリヤこなたが尋ねる松助どの、荷物金五十兩ア、コリヤ松助どのが佐渡へ行のよは違ひあり(梅)エ、折角尋ねる甲斐ものよ(伊)兎も角もわるいよよい世ぬ程よよしが所で何かのとあしトお梅怒のこよし伊兵衛氣の

毒がる仕打よて道具廻る  
○本舞臺都而松原川原の体爰へ以前の繁藏勝助出て来り傍りを見て(勝)繁藏金の沈めた所はこ、らか(繁)チ、そこだト刀を抜き勝助を切る是より立廻りよ成りト勝助へたる(繁)コレ勝助よく聞け吉久を罪よ落したも江川とお虎を殺し玉里の身の代金まで盗んだばみんなおれだトト、とめをさす爰へ清三出て繁藏の袖を取るを振り切り逃て這入る此時小六出てだんまりに成り兩人腕を試す立廻りあつて幕  
○五幕日本舞臺都而安治川橋松助身投の体爰へ松助後よりお梅出て来り(さ)そこへ行の松助さんか(松)お梅さん(さ)お梅へ逢ふとは幸ひ今は奥さま姫君さまでござ被成升た(松)奥さまと賊の爲よ仕業の御最期姫君さま今では苦界の勳(さ)エー(松)それよ附ても私身姫君の身代を佐渡へ持つて行五十兩よ失ふたゆへ死ぬるより外よ思案はあり(さ)サ、其金を私弟と相談

あし升れば待つて下さり升せ(松)何分頼升と涙の音よて仕打にて橋の上へ上る(松)南無阿彌陀佛飛込廻る  
○本舞臺都而阿治川橋の体爰に丑松卯の助船にて網を打て居る(丑)今夜は仕事かねへしやねへか(卯)そうよこんあはんまのばんはありやア仕ねへト奥よりよて身投くと(丑)何だお客さまが(卯)助ろく(丑)またくト松助を引上るトうたよて幕  
○六幕目丑松卯の助隣住居の体爰よ卯之助あささ住ひ居る爰へ家主來て(家)此度お上みよりお觸が出たのは浪人者泊る事いあらぬやト家主橋懸りへ這入る爰へお夏出て来り(夏)チ、卯のさん姉さんよお出被成升たゆつくり御あいなつを致升る卯のさん一寸いつて来るから内を少しお頼み申升ドお夏下手へ這入る(さ)コレ卯之助わしが元勤の御屋敷御家來よ出逢ふた所が其人が御主人よりの預り金五十兩を落したゆへ身を投るといふを留て來たゆへ五十兩あければならぬわいなア(卯)さういふ事

ならししが受合升た(さ)そんならそなたが嬉しやく  
○此事をまらして來升ふトあささ這入る此道具廻る  
○本舞臺都而丑松内の体爰よ松助丑松住ひ居て(松)夕アうらのお世話添ふふる(丑)何の禮よ及び升ふまかし若旦那妹お梅が目も見へぬのよあなたを懸懸ひ京まで参り升ればとよを歸るまで浮出被成て下さり升せ(松)成程一年此方逢ぬ女房お梅殊も娘までもふけしどの事逢よて遣りたけれと今もいふ通り五十兩の金がなければ生て居られぬ此松助(丑)其お金を調ねばとよも以前の義理が濟升せねば待被成れて下さりませ(松)さういふ事から玉里さまへ言譯ふ手紙でありとト松助奥へ這入る丑松仕打あつて(丑)受合の受合たがとよか金が出來ればよいト爰へお夏喜助出て来り(喜)おあつおれの爰らに待て居るからはな一を付て來ひ(夏)とよぞそふして下さんせト喜助下手へ小隠れをるおなつ内へ這入る丑松見て(丑)ヤイお多福とこいつていやアがるおれの心配もあらねへで

夏)そふさお心配は必からだよ(丑)いやアがるお心から  
どの何んの事だ手めへのよふなやつ居らねへ出て行き  
やアがれ(夏)ヲ、丁度幸ひ出て行から離縁状を書ておく  
れ(丑)エ、おれの無筆と仕つて居やアがつてト立てね夏  
を打(夏)わたしをどふすのだ隣の卯のさん来ておくれ人  
殺(ト卯)卯の助出て来り(卯)又夫婦喧嘩かマアよしねへ  
な(丑)卯のい、所へ来た離縁状を書てくれ(卯)おれの無  
筆を仕つて居るじやねへか(丑)違ねへそふごつてト愛へ  
喜助出て(喜)これが書て遣るよ(丑)こなたいおなつの兄  
貴(喜)氣に入らねへ女房さらおれが引取るからそふ思つ  
て居なせへサアおなつ来ひ(夏)ハイト兩人外へ出て  
(夏)卯のさん此お金を(喜)女のほふから手切だト兩人遣  
入る(丑)金どの何だ卯)何だか五十兩斗りの金をお夏が  
置いていつたト愛へ鉄藏出て(鉄)ヲ卯の助御が用があ  
るからそやく戻つてくれとよ(卯)用いまれていらアト兩  
人遣入る丑松仕打(丑)合点の行ぬ手切の金とト愛へ松

助出て来り(松)丑松どのさらば(丑)金が出来升た罫り乍  
是を讀で下さり升せト手紙を出す松助見て(松)此手紙の  
罫子でいこきたの女房おあつとのが扇屋へ貳度の勤めに  
いつた金是を受けていししが濟ぬ(丑)そんなら女房が貳度  
の勤は出かしたト悦ぶ(松)此金いこなたへお返す(丑)  
それでお夏が心も無速に成り升(松)たつて辞退も  
何とやらまかしながら此手紙玉里さまへどふを届て下さ  
れ(丑)まつかりとお預りト是よて道具廻る  
○本舞臺都而元の卯の助内よ成る愛よ卯の助おささ住ひ  
居る(卯)姉貴さつきの断の金が出来(さ)そりやはん  
まの事かいあア(卯)まだ手にい入らぬへが大丈夫だ(さ)  
さ)そふいふ事すこもはや江戶掘まで往つて悦して  
来升ふトおささ向ふへ遣入る(卯)さつさ丑松が女房のお  
夏が手切の金儲よ五十兩姉は受合つたも五十兩どふせお  
れが手際で出来ぬ金道さらぬ事ながら丑松を殺してト思  
案の仕打よて此道具廻る

○本舞臺都而元の丑松の内よ成る丑松松助居て(丑)浮機  
嫌よろしう(松)丑松どの最前物落さぬよ(丑)まつかり  
と懐に入れてムリ升る(松)そんなら丑松どの(丑)よいか  
便りをト松助向ふへ遣入る(丑)是でさつはりとしたお梅  
も最ふ戻りそふおものだト一寐入仕よムト床を出して  
寐る愛へ卯の助出て出刃にて丑松の寐息を伺ひ咽を突丑  
松わつといふト留めを差儀より手紙を出して悔りおし  
(卯)金の懐でねへかトたんをへ目を附引出しより金を取  
出し愛へお梅お松おささ出て来り卯の助隠れる家主も出  
て来り(お松)か、さん伯父さんが切られて居るわいかア  
(梅)何兄さんが(家)スリヤ大變だト手紙を見て(家)玉里  
さまへ松助より是が何よりよい手掛り是を持て戻へ出よ  
ふ(卯)南無阿彌陀佛ト此仕組幕  
○七幕日本舞臺都而新町九軒夜櫻の体爰に辻占や若衆喜  
助居て(喜)當時諸藩士此廊へ入込むゆへ姿をやつせし某  
と貴殿(辻)さやうでる仰せのとより萬事心を付ねば成

りすのト兩人わかれて遣入る愛へ清三小六兩花道より  
出で来り(清)此太平を勤王家おどい、ふらし事を企ツ  
浪士の馬鹿者(小)幕府をの、しる貴殿の勤王論(清)申一  
たが何んといひたした浪人やせ腕にて大樹を倒さ力がある  
か(小)ゆるかなさか手並を見せん(清)何をト鳴物成る立  
廻りよ成る(玉菊)道中の形にて出て来り(玉)マアトま  
つて下さんせ(兩人)玉菊とやらおいたト(玉)イヤト  
待つて下さりませ不粹の私しにとふを預けて下さんせ(清)  
そちが詞に任して(小)此場は此儘(玉)納めて下さん  
すか嬉しうムんをみおの衆お貳人さん扇屋で酒の用意を  
(新造)よふムんをわいおアトみおく遣入る(清)よしさ  
お縁に(小)何れ参つて(清)禮の萬々(玉)何のお禮に及び  
升ふ(清)然らばそこ元(小)イヤト同伴と吉原雀の唄よて  
廻る  
○本舞臺都而あふさや二階の体爰に新造若衆わや  
いふて居る傍に清三小六住ひ居る新造始めみおく奥へ

這入る小六仕打あつて(小)早川清三どの先刻の失禮御免  
下され(清)どふて拙者姓名を(小)いつぞや松原川原  
にて御手内までよく存てゐる(清)人をあやめし曲者を捕  
へん思が(小)討れし者、清久公の(清)討しは植木や繁藏  
とて(小)悪人共よかだん曲者(清)スリヤ其夜出合しは貴  
殿であつたか(小)何卒そこ元にも勤王家の有志でゐるか此  
處さん爲(清)スリヤそこ元にも勤王家の有志でゐるか此  
上は共よ力を盡し申さんト爰へ玉菊出て來り(玉)お貳人  
さん(兩人)扱ひ大事と(玉)お手に掛けて下さんせ(兩人)  
何んぞ(玉)サア大事を聞た私ゆく(小)流石は玉菊男子も  
及べぬ命は申受たぞト爰へ三郎兵衛出て來り(三郎)一寸  
待て下さり升せ(玉)たまへ、旦那さん(小)此家の主じ三  
郎兵衛よナ(三郎)いかよも三郎兵衛でムリ升るが玉菊が  
聞大事より私が残りも大事を聞升た女を殺せ私をお殺し

被成ませ此玉菊は筋目有者てムリ升る(小)玉菊を筋目の  
有者とは(玉)ア、モンそれを(清)お隠しいつぞや北野に  
て(玉)ヲ、難儀をお救ひ下されたか方でムリ升た(清)吉  
久公の御息女がどふして此廓(玉)おはづかしうムリ升  
る(小)スリヤ此玉菊どのが吉久公のそれよ付てのいまだ  
敵の手掛りのムらぬか(清)其手掛りの是る片袖討者は  
植木や繁藏(玉)スリヤ母の敵が繁藏とやら(清)しかし國  
司氏と交りとなし玉菊は片袖を渡せば用なき身共(小)然  
らば早川氏お暇申そふ(三郎)暫くお待下され升せト口耳  
く(小)スリヤ此廓内にて(三郎)それぢやによつて裏より  
こつとり清三さまハ玉菊と此の仕込よろしくあつて廻る  
○本舞臺都而扇屋二階はなれ座敷の休爰に清三宿木玉菊  
住ひ居て(宿)玉菊さまの御家來の松助の女房お梅の妹で  
ムリ升る(清)さやうであつたか(玉)私程因果身はム

り升せぬ(清)再び出逢しも不思議の御縁(玉)力をあつて  
下さり升るか(清)身に及ぶ程の限りは(玉)御婚しう存升  
るそれが誠の事なれば(宿)はい首尾でムリ升るト屏風を  
立廻す(宿)お親方さんの云付ゆへ首尾よくお察かし申た  
ア、お方を力と頼めば玉菊さんの仕合せト仕打よて奥へ  
這入る爰へ七助出て來り(七)お尋ねの早川清三お用だト  
屏風を取のける仲よ三郎衛居る見て(七)ヤあゝたは旦那  
ト仕組仕打よて幕

る(吉)そちは松助忠義の爲島へ來りし忠義の程過分と思  
ふぞ(松)恐れ入たる其仰せ是とやそも姫君様は御孝心ゆ  
へ又ニッよは下郎めが御恩返しゆへ幸藏と名を改めてト  
爰へ三吉出て來り(三)幸藏どのの内かア(松)ヲ、三吉  
どのか何か用か(吉)今日は死行し妻が命日ドレ佛參致  
さんト吉久這入る三吉仕打あつて(三)此度おふれといふ  
ハ大坂寺島の船大工丑松を松助といふお人が殺して五十  
兩どりその松助が此佐渡へ來て居るゆへ今よ大坂から捕  
手が來るといふはあし(松)どふしてそれが(三)何でも人  
の断で玉里へ松助が送る手紙で見たつたどやらこきた  
ハ吉久さまの御家來ゆへモヤその松助どのおらはやく  
よげねばあらぬぞや(松)わしのさやうなものでムリ升



せぬ(三)とふかひのふ又あした逢升ふト這入る(松)コリ  
 ヤ大事にあつて来たわいと爰へお梅お松出て来り(梅)物  
 が尋どふムリ升るト松助お梅を見て(松)ヤそちのお梅か  
 トいはふとして仕打(梅)松助さま此島よ居り升あふど  
 ふぞお敷へ被成升せ(松)其松助といふ人の丑松といふ人  
 を殺し罪よて繩よか、つて大坂へ連れて行れ升た(梅)ス  
 リヤなんまの事でムリ升るか又も夫よ逢ぬどわかあしぬ  
 事でムリ升るコリヤ最ういつそト死のふととるを(松)コ  
 レ女中待さつしやれ又逢ふ事もあらふから死ぬのいやめ  
 さつさつしやれ(梅)仰せよ随ひとまり升ふコレお松行

升ふ(松)そんならもふ行しやるか(梅)ハイト行よ掛る此  
 時後よて吉久(吉)尋ねる夫ト松助逢そふ(松)ゆつたにそ  
 れを(吉)苦しうさい(梅)あきたさまを吉久さま(吉)これ  
 成るがそちが夫ト松助(梅)そんならおまへが嬉しや  
 (松)捕手向ひ坂上彦九郎の陰義よ合ん思ひしが(梅)其  
 坂上彦九郎の御主人さまを罪せし悪人(吉)スリヤ彦九郎  
 偽筆をもつてト松助仕打よて(松)彦九郎引取んと這入る  
 彦九郎出て吉久の肩先を切れぬ(吉)だまし打よするは何  
 者だ(坂)彦九郎さまだ(吉)愛期なせト切て掛る立廻り三  
 人を切殺し彦九郎息よつと爰へ松助出て来り(坂)南無三



彼れがト逃て這入る松助見て(松)儲に彦九郎ト此仕組違  
 具廻る

○本舞臺都而玉菊部屋の休爰よ長治繁藏源八宿木新造禿  
 喜助みなく住居て(長)玉菊が身をよるとは憎くひや  
 つ(繁)何でも身受をして自由がよろしうムリ升る(長)よ  
 いの身受なさん(喜)太夫はおまへさんの自由に成り升せ  
 ぬト爰へ玉菊出て来り(玉)私よは問夫が有るゆへおまへ  
 の自由よはならぬわいさア(繁)問夫といふの清三ど此  
 植木やの繁藏が睨んで置た(玉)おまへが繁藏ならこれい  
 覺へがあるか(繁)それはと悔りする(喜)こいつらよ詮議

がある(長)武士に向て詮義とは何んのたわ言(源)最ふ了  
 簡ならぬわへト立掛るを此時三郎兵衛出て(三郎)お武家  
 さまお待下されませ(長)こちらは此家の主三郎兵衛待ど  
 は(三郎)外でもムリ升せぬあたへたいし喜助失禮のへ  
 喜助は暇をやるぞ(喜)何科あつて(三郎)何にもいふあト  
 腹より証文を出して玉菊宿木も遣る(玉宿)これは(三郎)  
 浪人者引合ゆへ暇を遣るのだまかし聞けば證據の品から  
 吟味を仕させへ(長)その方が吟味をとるとは(三郎)私で  
 はムリ升せぬ今に會所から(繁)そんなら吟味に會所から  
 (源)こいつは大變なト此仕組廻る

○本舞臺都而清三郎家の体爰は清三玉菊居て(清)三郎兵  
 衛が情みてそちをばじめ喜助宿木までよ年季の證文(玉)  
 それも付升てあたのお情みて母の敵の繁藏とやら親方  
 さんの情にて(清)打つは今爰あれと助太刀からぬ小六  
 氏と約せし詞もあれば伏見の戦争も行ねば成らぬ事もあ  
 り(玉)スリヤ叶ひ升せぬかト爰へ源八出て来る(源)清三  
 覺悟と打て掛るを(玉)長治の下部源八(清)さてはこやつ  
 がト源八打て掛るト源八逃るを門口よ小六居て扱打よ  
 源八を切る清三玉菊是を見て(清)貴殿の小六どの(玉)は  
 んよあなたの(小六)手紙を持っておしらせし申せしが御用



意は(清)得よ用意はよろしうらむと爰へ喜助出て来り宿  
 木も出て(喜)様子は奥よてお聞申升た(宿)祝言やら門出  
 の祝ひやら(喜)御酒盛を(清)成程是もそちがえたらさト  
 此仕組氣味合よて幕

○大詰本舞臺都而宇治の里智妙庵室体爰に百姓貳人智妙  
 住ひ居て(百)此ごろ軍騒ぎの其中でこきたのよふ修行よ  
 出被成るのよ(智)何の事たしらを構ふものがあるものか  
 いの(百)またあそ逢い升ラト此時向ふより玉里走り出て  
 来る直よ内へ這入る智妙見て(智)何所のお女中のしら  
 ねども急病でもヲ、玉里さまか御心儘かよト玉里心付さ

(玉)合點の行ぬ我名を知りしハ顔を見て(玉)ヲ、そる  
 たいおきさかいのふ(智)ヲ、嬉しや〜(玉)レヲ以せん  
 又替るこあたの姿ハ(智)是には段〜様子のある事あな  
 たハ厨屋ハ河竹の身其外ハ非業におはて被成れし奥さま  
 の問ひ吊ひそれゆへ此姿で(玉)わしも敷〜断はわれど  
 曲輪にありし時、かわせし夫トの跡を尋ねる途中非人  
 ども捕へられト此時非人願藏早助出て来り直に内へ這  
 入る(願)爰の内へ逃込んだ女を出せ(智)しらぬわいあア  
 (早)そふぬかしやア家さがし仕る(智)そんなるうせさ仕

やると今ハ軍官方が来升ぞアレ〜向ふへ(願)こいハ  
 ハ大變だト外へ出る爰へ非人卯の助繁藏出て来り(繁)首  
 尾よくいつたか(早)官軍が来るといつたによつてからア  
 うと氣味かわるいの〜(願)手めへ遠勝手よしと早助願  
 藏這入る(繁)おれば爰ハ忍んで居るから手めへ首尾よく  
 やれ(卯)合點だト卯の助忍ぶ(繁)おあまりをお願ひ申し  
 升る(智)施をやり升ふト錢を遣る智妙繁藏顔を見て(智)  
 おまへは大そふ怪我を仕升たなア(繁)是は報でふり升る  
 長治といふ侍ひに頼れ將軍の寶藏へ忍び金と釜を盗みそ

れを吉久よぬりつけ吉久島流しそ乃娘の身の代を持つて  
 居母とお虎を殺しそれから大坂へ往つて城内ゑんせう藏  
 より破めつしとよく報でこんを片輪よ成り升た(智)そ  
 んから吉久さまを罪せしは長治であつたか(繁)吉久さま  
 の由縁でふり升るか(智)御主人さまやわいのふ(繁)南  
 無阿彌陀佛ト死ふとする玉里出て(玉)コレ繁とやら待ち  
 や(繁)ああなたは玉里さま(玉)死ぬるとまで敗心ある長  
 治の有家をしらしてたべ(繁)今はどこに居るか(玉)生死  
 の程もわからぬかいのふ(繁)さんねんでふり升るト此時  
 松助内へ這入る(松)偽りものめがト玉里松助を見て(玉)

こあたハ松助とふして島より(智)御主人さまハ御無事か  
 いのふ(松)人手よか、つて御最期(玉)智)エ、(松)それも  
 戀のかとふと彦九郎の仕業(繁)南無三それをト合口を拔  
 き切て掛るを松助繁藏を當る玉里懷劍よて突て掛る松助  
 留て(松)何と被成る(玉)丑松とやらを手に掛し人非人(松)  
 (松)お待下さり升せあなたにお目ふ掛り主人の敵の彦九  
 郎ゆへおしらせすよ参り升た是さへおまらせ申せばよふ  
 なさ下郎ト死のふとをる此時卯之助出て(卯)待しやれ松  
 助どの(松)卯の助どの待どハ(卯)わしが云わけト腹へ突  
 立るみな〜悔り(卯)丑松どのを殺したハ此卯の助とふ

姫君さま松助どの、仕業でハムリ升せぬト爰へ以前の  
 非人早助願藏出て来り(早)さつき旦那が頼みゆへやつら  
 と尋ねた所(願)宇治の渡場よ貳人乍いんと(松)添けない  
 是より直ト行よ掛る此時繁藏心付き(繁)うぬをやつて  
 ひと覺期しろト切て掛を松助繁藏を切る(松)サア姫君敵  
 の片われ御存分よ被成升せ(玉)敵の片われト、めをさ  
 す此仕組皆々仕打よて渡責まく冠せる渡責幕切て落とと  
 ○本舞臺都而扇の芝敵討の体爰よ玉里松助清三彦九郎長  
 治住ひ居る(玉)父を罪せし杉本長治(松)それのかたんの  
 彦九郎(清)此清三よは扇の敵(玉)わらはには父の仇(松)  
 下郎が爲よハ妻の恨み(彦)モウ斯ふなつたら百年目(長)  
 彦九郎ぬからちト是より立廻りよ成リト々兩人を切倒し

(玉)恨の刃思ひ知つたか(清)忠臣孝義の道よ叶ひ(松)  
 志しとどげたる上は(清)今よりしては玉里と妻よ娶り  
 て(玉)わらわの夫へ貞女を守り(松)我は主人へ忠義を尽  
 さん(清)目出たいト此仕組幕

櫛附茶屋記

三	河	屋	菊	屋
川	名	屋	三	好
森	川	岡	田	
万	屋	立	花	屋
松	木	竹	屋	
小	川	版	子	屋
若	竹	梅	の	家

明治十七年二月廿一日  
 綱敷町三丁目十八番地  
 編輯兼出版人 保坂由兵衛  
 (定價金八錢)